と onunč čar (čär) かとも思はれるが、それにしても čar (čär) の語義を解し難いのは遺憾である。言ふまでもなくこの一行は毎紙の丁づけで、この殘簡は……第三章の第一葉から第五葉に及び、その前に、丁づけ無しに經題を記した一葉と、別に最後に當る一葉とを存するものであること、初めに解説した如くである。

⑦ ädgü öglıš bilıš büšüg-lär は「善知識」に對應せしめた語で、この殘簡には只だ一回、II[4] に於て ädgü ögli の二語だけを、その譯語として用ゐた外は、すべてこの四語を當ててある。從來發表されたトルコ（回鶻）譯の佛典では、「善知識」に對してただ ädgü ögli とだけ書いてあるのが普通であるが、俱舍論實義疏には（第一卷44左）この殘簡と同じく ädgü ögli bilıš büšüg が用ゐられてある。「善知識」と同義の佛語として「善友」といふ語のあることは、曾て Chavannes と Pelliot 兩氏も注意したことで（Un traité manichéen (320)）あるが、この bilıš büšüg（賢明なる友）は ädgü ögli（善知識、善女）の重語（Hendiadys）に外ならぬと思はれる。bösük については Prof. A von Gabain が天地八陽神呪經の譯述 62, Anm. 105 に於て、baγır bösük＝ädgü ögli ＝iš tuš と説明してゐるのを參照すべきである。

büṣüg の ṣ は、特に š の音を示したものと思はれる。下に屢々見えるやうに、時には s の下の點を記してゐないこともあるが（例へば III[6] III[13] V[4] 等）もとより同語に外ならぬ。この外にも VIII[1] の tüṣ-, IX[2] の aṣ- が、それぞれ普通に tüš-aš- と音ぜられるものに當るのを見れば、ṣ は š を示したのに外ならぬと思はれる。

⑧ ädgü adrur は「功德」の譯語である。ädgü は「善」「善き」の外、「優れたる」の意から「德」の義に用ゐられることは既に知られてあることであり、俱舍論實義疏にも I[17] 左を始め、諸所に見えるところである。adruq は Bang・Gabain 兩教授によれば artuq (Vorzug) の Metathese であらうといふ (Türkische Turfan Texte V. Anm. B 71)。なほこの殘簡 III[4] にも、これと同じく「功德」に對して ädgü adruq の二語が用ゐられてある。

⑨ kingürü nomlamiš önüšlüg の三語は、書寫の際脫落してゐたのを、後に小字で補記したのである。從つてこの行だけ、語數が他の行よりも多くなつてゐる。kingürü は zu verbreiten, erweiternd の義で (Müller, Uigurica, S. 28, Radloff,